

Before
After

道しるべ

道徳通信

上尾市立太平中学校
道徳通信 第4号
令和6年9月13日(金)
発行者 校長 井浦 博史

普通って

1学年職員

私が小学校4年生の時、クラスにほとんど耳の聞こえない男の子と同じクラスでした。耳が聞こえないので、彼はうまく話すことができませんでした。発する言葉は「あーあーヴーガー」といった具合です。

ある日、クラスの男の子と彼は殴り合いの大ケンカをしました。担任の先生は、なんでケンカをしているのかわからない様子でした。

でも、不思議と同級生の私たちは、彼との会話に一度も困ったことがなかったのです。

だから、ケンカも普通の子と同じようにやりましたし、班活動も一緒でした。先生へは誰かが通訳をしていました。

今から思うと不思議ですが、小さな私たちには、耳が聞こえない子、聞こえる子、しゃべることができる子、できない子を区別する概念がなかったからだと思います。

幼稚園生のわが子をダイアログ・イン・ザ・ダーク（視覚障害者の案内により、完全に光を遮断した”純度100%の暗闇”の中で、視覚以外の様々な感覚やコミュニケーションを楽しむソーシャル・エンターテイメント）に連れて行ったことがあります。普通にブランコで遊び、普通にコップに注いだジュースをいただいでいました。こうなるともはや普通って何だろうと感じました。

大人になるにつれ純粋な心が無くなってきているから、いろいろなものが見えなくなっているように感じます。いつまでも真っ白な心を持ち続けたいものです。



うまくいっているときは 周りに人がたくさん集まる

しかし一番大切なのは どん底のときに 誰がそばにいてくれたか

にしじろ学級職員

この名言を聞いたことがありますか？これは、野球の東北楽天ゴールデンイーグルス・名誉監督、野村克也さんの言葉です。

野村監督は、ヤクルトで何度も日本一になり、阪神の監督も務めました。しかし、身内の不祥事で阪神の監督を辞任しなくてはいけなくなりました。その時、多くの人が離れていったそうです。

そんな時に手を差し伸べてくれたのが、社会人チームを持っていたシダックスの会長だったらしいです。そのおかげで野球界に復帰し、3年後に楽天の監督になりました。

苦しいときに、いかに助けてくれる人がいるかが大切だ。と言っていました。

みなさんはどうですか？例えば、部活動で勝敗を決めなくてはいけない時、あなたの活躍でチームが勝利したときには、たぶんみんなが寄ってくると思います。でも、あなたの失敗やミスで負けたときはどうでしょうか・・・あなたが辛い思いをしている時に、そっと寄り添ってくれる仲間がいますか？3年生はこれから受験という大きな壁にあたります。勉強に行き詰ったとき、そっと寄り添ってくれる人はいますか？あなたが辛いとき、大変なときに、そばにいてくれる人がいたら嬉しいですね。そして、そんな人になれたら素晴らしいですね。



大切にしてほしいもの

2 学年職員

ある日の私は、職員室でこの道徳通信の題材が無くて困っていました。そんな私の目に飛び込んできたのは、「夢大」や「健明」という文字です。皆さん承知の通りこれは、太平中学校の先生のお名前です。そこで名前に関して感じていることを少し述べたいと思います。

突然ですが、中学生の皆さんは自分の名前が好きでしょうか。学生時代の私は自分の名前が正直好きではありませんでした。それは、一回で正しく読んでもらえた経験は無いですし、パソコンや携帯で変換しようとしても絶対に出てこないからです。(現在でも「ユウダイ」と打っています・・・)でも、親になってみると、名前を決める際のワクワク感(毎晩のように布団の中で画数診断などしていました)、そしてこんな人間になってほしいという願いなど、様々なことを考えさせられます。そんなことを体感した現在は、「自分の名前が好きではない」なんて言えないなと思っています。

さて、中学校の先生をしていると、「テストの氏名欄を本当は漢字なのに平仮名で書く」「プリントに苗字しか書かない」「名付けた人が不快に思う可能性のあるあだ名」など、自分と友だちの名前を軽んじている場面を目にする機会があります。大人になると苗字を使う機会が大半で、名前で呼び合うことはあまりありません。そんな学生の今だからこそ自分、そして友だちの名前を大切に生活してほしいと思います。

心の整理

3 学年職員

ぼくの名は、よしお。ぼくが中学一年生に入学したとき、担任の先生からこんなことを言われたことを覚えている。「中学校で学んだことは、もしかしたら一生の宝ものになることがある。 やってみようかな?でもな、、、と迷ったらとにかく飛び込んでみなさい。 やってみなさい。 きっといいことがあるよ」このことばがぼくの気持ちの中にずっと残っていた。

そこでぼくは、迷ってはいたが校外学習の実行委員を3年間やることにした。1年生の一泊の自然教室では、実行委員長になり、「調べ事」の内容や集団行動はじめ二日間の生活の約束事を作った。放課後の話し合いが主だったがみんなが協力してくれたおかげで、りっぱなしおりも作ることができた。お互い協力するということが大切なんだということがこの行事を境にして学校生活の面で見られるようになった。この時は、「やってよかった」とぼんやりと思っただけだった。

2年生になり東京校外学習では、ぼくはまた実行委員長を務めた。今度は先生方の手を離れて班行動で学習する。だから、よりまとまって行動することが求められる。放課後の話し合いでこんなことを主張した委員がいた。「においの少ない整髪料をつけていてもいいですか?」というのだった。この時は、「中学生らしさ」や「普通利用しているのか」「なぜこの時ばかりやる必要があるのか」などが話し合われた。また「食べながら歩いてもいいのか」「自販機でジュースを買ってもいいのか」など、少々個人的な主張と思えるような意見もあった。話し合いの結果、「中学生らしさ」を基本に考えて行動しようということになってどれも自分の責任でやってもいいことになった。この行事を境に学年のみんなには、「自分の行動」をよく考えるようになり、生活の仕方がぐっと引き締まったように感じた。やっぱり話し合っただけで大切なんだと感じた一年であった。

3年生になって修学旅行の実行委員長になった。京都や奈良を完全に先生方の手を離れて行動し学習する。1日目、奈良公園・東大寺を見学し、西ノ京の薬師寺・唐招提寺を見学した。さすがに欲を出し過ぎた。ぼくたちは疲れ切っていた。夕食の後実行委員会がありぼくたちだけは9時半からの入浴を許された。ぼくはゆっくり入り一階ロビーのソファに寄りかかりこれまでの事を思い出していた。その時ぼくの肩を「とんとん、とんとん」とたたき「こんなに遅くまでソファに座ってテレビを見ているのはマナーに反するよ」と食料を搬入している男性が声を掛けてきた。ぼくの頭は真っ白になった。「ぼくがマナー違反の人間!ぼくがテレビを見ていた!」ぼくは何も考えられずこの日は寝た。翌日、かおるさんは「よしおくん、なんだか元気ないわよ、疲れちゃったの?どうしたのよ!」訳を話した。「いろんなことがあるよ、あなたには200人の人がついているのよ、しょげてないでしっかりして!!」そう言われたとき「そうだ、ぼくにはまだまだやるべきことがある、みんなのために頑張ろう」そう思ったら足が軽くなった。